

# 中間報告書

第一回（2013年11月4日～2014年2月5日）

国際ロータリー第2690地区  
地区補助金奨学生 永末藍

## はじめに

時が過ぎるのはあっという間で、イタリアに到着して5ヶ月が経ちました。日本を発った8月末はまだ入学が正式には決定しておらず、ボローニャ音楽院の入学試験を控えていたため緊張と不安な気持ちでいっぱいでした。ボローニャに到着した直後は試験勉強で頭がいっぱいで、ボローニャの街の美しさには目も触れず過ごしていました。しかしこちらでの生活にも慣れてきた今、毎日のようにこの街の素敵なところを発見することができ、改めてこの地で生活できることの有難さを実感することができます。

まずは私の住む街、ボローニャを簡単に紹介したいと思います。

世界でも最大級の観光都市であるイタリア共和国のエミリア・ロマーニャ州の州都であるボローニャ県は、世界最古の大学、ボローニャ大学があることで有名です。このボローニャ県の最大の特徴は街全体の色で、条例により旧市街地の外壁と屋根は赤茶色の塗料とレンガを使用するよう定められています。さらに旧市街地の中心に位置する道路や広場もすべて赤茶色のレンガや石材で作られているため、品があり尚且つ温かみのある風景が広がっています。



赤茶色のレンガが敷き詰められているネットゥーノ広場とマッジョーレ広場

## 学業面での成果

ボローニャ音楽院では、外国人学生のための授業をいくつか用意しており、イタリア語の発音やイタリアオペラにおける言葉の表現法などを学ぶことができます。私はその中から「イタリア語」、「楽譜の読解法」、そして「レチタティーヴォ」を今年は選択したのですが、イタリアオペラを学ぶ外国人が最も苦戦するのがこのレチタティーヴォです。そもそもオペラは一般的に、序曲とアリア、重唱、そしてこのレチタティーヴォで成り立っています。レチタティーヴォとはその場面の状況や会話をまるでしゃべっているかのように歌う部分なのですが、イタリア語の発音と言葉の表現の仕方を完璧に習得しなければ成立しない部分なので、イタリア語を母国語としない我々外国人学生にとっては非常に重要な授業です。この授業では毎回いくつかの楽譜をその場で渡され、数分後に他の学生の前で歌うという形をとっています。音と言葉をすばやく正確に読み取りすぐに表現しなければなりません。厳しい授業ではありますが、イタリア語の発音の勉強には大変役立っており、さらに楽譜の読解が以前よりもすばやくできるようになりました。



レチタティーヴォの授業の様子

また、音楽院は語学学習にも力を入れており、グローバルな音楽家を育てるため英語の授業も受けることができます。イタリアの音楽院での授業なので、もちろんイタリア語で受講しています。中学、高校、大学で学んだ英語の文法や単語を記憶の底から掘り起こしながら英語での会話力を身につけています。

そして肝心の歌のレッスンに関してですが、素晴らしい体験の連続です。まず最も大きな収穫は、自分の声と向き合い、自分の声をどのように使えば最も輝くことができるかを知ったことです。運よく私がついている先生と私の声はよく似ているので、どのような曲が私の声に合うのか、どのように声を出せばいいのかなど、多くの助言をしてくださいます。そしてそれを実行すれば驚くほど簡単に美しい声が出るようになりました。今は主にロマン派、すなわちG. ロッシーニやG. ヴェルディ作曲のオペラのアリアや宗教曲を勉強しています。

有難いことに先生方の推薦により5月と9月の学内コンサートで歌わせていただくことが先日決定したので、ますます気を引き締めて素敵な音楽作りをしていきたいと思えます。

## ロータリーとの関わり

こちらでお世話になっているカウンセラーのクラウディオさんとは11月末にお会いすることができました。とても親切でユーモア溢れる素敵な方です。日本に対してとても興味を持っていらっしゃるので、日本の経済状況や政治に関する事、そして文化などに関する会話を楽しみました。

奥様であるマリアダニエラさんは日本の料理が好きで、来月カレーライスパーティーを開催するそうです。そこに招待されたので、久々のカレーライスを楽しもうと思えます。

また、去年の12月16日に開催されたロータリークラブのクリスマスディナーパーティーにも招待していただき、そこで数曲歌わせていただきました。そのパーティーにはフランスのパリからのロータリアンの方々が出席されていたので、その方たちへのサプライズプレゼントという形でフランス国歌を披露しました。フランス語の曲は歌ったことがなかったので、フランス人の友人に発音のレッスンをしてもらい、なんとか成功を収めることができました。他にもイタリア国歌やG. ヴェルディー作曲の乾杯の歌、G. プッチーニ作曲のオーミオバッピーノカーロを歌い、みなさんに喜んでいただけました。特にイタリア国歌を歌ったときはお店の従業員の皆さんも一斉に手を止め一緒に歌い始め、みながひとつになったように感じました。イタリアの人たちの、自分の国を誇りに思い愛する気持ちが伝わってきた瞬間でした。



クリスマスディナーパーティーの様子

また、以前から提案していたチャリティーコンサートの件をクラウディオさんに相談したところ、素晴らしいアイデアだと言ってもらい、暖かい季節に開催することになりました。浴衣を持ってきているので、それを着て日本歌曲を歌おうと考えています。私が想像していた以上にイタリアでは日本の文化はあまり知られていないようなので、日本の伝統的な衣服、そして音楽や言葉を知る良いきっかけになればと思います。

## 直面した課題と今後の課題

上でも既に述べたように、イタリアには日本の文化などがあまり知られていないように感じられます。お寿司や漫画、アニメなどは有名なのですが、その他のことは伝わってきていないなどというように見受けられます。例えば、多くの人が、日本人は毎日お寿司を食べていると思っていますし、中国語と日本語はほとんど同じだと思っている人もいます。これらは簡単な例ですが、他にも日本の伝統的な文化、芸能など、日本が世界に誇るものが知られていないのは大変残念なことです。私とそのチャリティーコンサートをすることで、それを見た人々が得る知識は日本の音楽の独特の音の使い方、日本語の響き、そして衣服に関することだけです。ほんの少しの知識かもしれませんが、これがきっかけで日本に興味を持ってくれる人がいるかもしれません。そのようなきっかけになればうれしいです。

また、イタリアが抱える問題も多く見えてきました。ボローニャには素晴らしいアコーディオン奏者、ヴァイオリン奏者、打楽器奏者などがたくさんいます。しかし、彼らはみな路上で演奏し、路上で暮らしています。イタリアはヨーロッパの中でも経済的危機に陥っており、就職率の低下、所得の低下など、みなが多くの問題を抱えて日々暮らしています。特に音楽を学ぶ人にとっての状況は悪化する一方です。イタリア全国にある歌劇場が経済危機に陥り、やむなく閉鎖する小さな劇場などもあります。みなが娯楽に費やす金額を減らし、生きることに必死な世の中にいる今、音楽家がすべきことは何なのか。目指すべきものは何なのか。音楽院の友人と頻繁に討論するのですが、その答えはまだ見つかっていません。この問いの答えを見つけることが私の今後の課題です。

最後にボローニャ歌劇場の写真を載せます。先日ボローニャ歌劇場のシーズンが始まり、そのリハーサルを観に行きました。リハーサルと言っても、本番と全く同じ衣装で本番とまったく同じように演じられるもので、学生は5ユーロ（今のレートで750円ほど）で観ることができました。演目はワーグナー作曲の「パルシファル」で、17時から22時半までの約5時間半の大作で、現代的演出のオペラでした。世界的に有名なボローニャ歌劇場のオペラを5ユーロで見ることができるのは、イタリアに住む人の特権だなどつくづく感じます。音楽が身近な国であることを再認識することができました。



ワーグナーの写真を使った幕



ボローニャ歌劇場の美しい内装